

# 岐阜分室便り

## 第17回 自然共生河川研究会報告

岐阜分室長 大竹 良昌



自然共生河川研究会は、自然と共生した川づくりの一層の展開に資することを目的として、平成7年度から（財）リバーフロント整備センターと（財）ダム水源地環境整備センターとが交互に開催し、本年が第17回となり岐阜分室が担当しましたので、その内容等について報告します。

研究会は、平成20年12月4日（木）名古屋駅前の名古屋通信開館において学識者をはじめ国、地方自治体、法人、建設関係など約190名の出席により盛大に開催できました。



冒頭、砂川専務理事の主催者挨拶のあと、来賓の佐藤直良中部地方整備局長から挨拶を頂き、河川環境を考える際には3つの要素があり、1点目は「住んでいる人」、「利用している人」、「管理をしている人」が共通認識を持って不断の努力が

必要。2点目は「保全」、「維持」、「発展」させるためには経費がかかる、その経費を削減する努力が必要。3点目は学術的に裏打ちされた専門的知識が必要。と述べられました。

### ◎講演報告

テーマは、河川整備計画が策定されている中で自然再生についても位置づけられ、実施計画策定のため多くの河川で調査検討されていますが、佐藤局長の挨拶にもあるように、専門的な知識を習得することを目的に～河川環境に配慮した河道計画について～としました。

演題と講演者を紹介し、講演概要を報告します。

#### 1. 特別講演 「野生生物との共生を考える」

北九州市立いのちのたび博物館

小野勇一 館長

野生動物との共生を考えるとき野生動物とは何かを認識する必要がある。

河川管理をしていく上で、イヌワシやクマタカなどの猛禽類には配慮してるが、狐や狸など哺乳類も自然に対し非常に大きな要素になっている。また、地球上に地理学的分布帯と気候的分布帯があり、そこで構成している哺乳類の種類は全く異なる。河川の水辺の構造を考えたとき、河川の生態系（植物連鎖、社会構造、繁殖形態）をしっかり調べる必要があると、ご講演をいただきました。

#### 2. 講演

##### 1) 「河道内樹林が洪水流に及ぼす影響について」

九州工業大学大学院工学研究院

建設社会工学研究系 重枝 未玲准教授

河道内樹林が洪水流に及ぼす影響を考慮しながら樹林の管理について、大分県の大野川で国土交通省との共同研究成果をご講演をいただきました。

大野川では、出水により洪水が計画洪水水位を越える区間が発生し、樹林伐採を基本とした河道計画を作成するため河道内樹林の洪水流に与える影響について解析した。解析にあたっては新たに「拡

張準2次元解析モデル」を構築した。解析の結果、樹木群の治水機能として、水位上昇を起こす樹林と水位を計画高水位に維持できる樹林があることが解り、河道内樹林の管理法として、樹林管理マップを作成し、計算された繁茂面積を超えたときに伐採することが合理的な管理が可能となる。今後、樹木の繁茂状況のモニタリングもしていくと結ばれました。

##### 2) 「河川における将来に向けた自然再生のあり方」

山梨大学大学院

医学工学総合研究部 北村 眞一教授

自然再生を実施するには①初心に戻って見る②新しい視点で流域を見る③長い目で環境教育④エコ全体から考える⑤素材と製品のエコ化⑥川づくりのパートナーシップ⑦治水、利水、環境のトータルデザイン⑧持続可能な社会の8項目の課題（問題点）について外国の河川も含めたいろいろな河川の実例の紹介により、「河川における将来に向けた自然再生のあり方に向けて」という内容のご講演をいただきました。

##### 3) 「全国自然再生事業の紹介」

（財）リバーフロント整備センター

研究第四部 前田 諭部長

川の自然再生の3つの要素①流域の視点②多様な主体の参画③アダプティブマネジメント（仮説、検証、モニタリング）について、（財）リバーフロント整備センターが実施した全国自然再生事業の紹介とその考えなどを講演されました。

また、事業が今後認められるためには、委員会、協議会などを設けて学識者等の科学的合理的な意見を聞いたり、地元との融和を目指しながら円滑に進めていくことが重要であると結ばれました。

紹介された事例は、

- ・アザメの瀬（松浦川：氾濫源の復元）
  - ・ビオトープの整備（荒川：湿地の造成）
  - ・釧路湿原の河川環境保全（釧路川：蛇行河川の再生）
- などでした。

### ◎おわりに

ご多忙にもかかわらず、ご講演を引き受けていただき、また、多くの講演資料の作成をしていただきました先生皆様に厚く御礼申し上げますと共に、ご出席いただきました中部地方整備局長様はじめ多くの方々に厚く御礼申し上げます。

